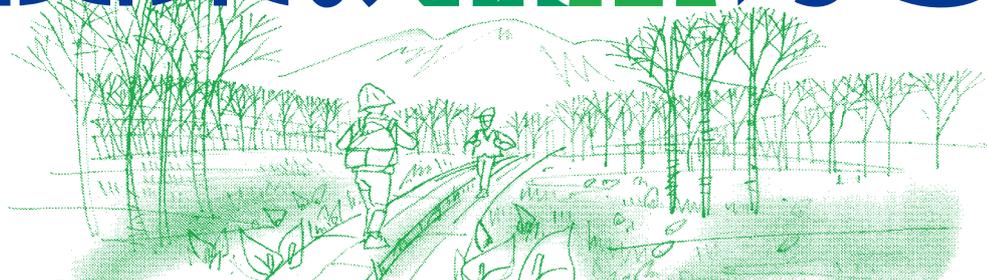


平成20年10月1日

第55号

関東の森林から



国民の森林・国有林

関東森林管理局

前橋市岩神町4-16-25

TEL (027)210-1158

FAX (027)210-1159

<http://www.kanto.kokuyurin.go.jp/>



尾瀬ヶ原からの燧ヶ岳

(群馬県利根郡片品村)

(撮影：関東森林管理局 天野 里美)

美しい森林づくり

「人工林施業に関する現地意見交換会を開催」

計画課長 林 視

私の視点

「森に暮らして」

南アルプス芦安山岳館 館長 塩 沢 久 仙 氏



広報「関東の森林から」は、日本の森林を育てるため間伐材を使用しています。

美しい森林づくり

人工林施業に関する現地意見交換会を開催

計画課長 林 はやし 視 のぞむ

一〇〇年先を見据えた森林づくりを進めていく上で、効果的な施業をどのように選択していくか？

こうした考えに基づき、関東森林管理局計画課では、長伐期化等に対応した間伐等のあり方に関する意見交換会を、茨城・天竜 両森林管理署管内の国有林で開催しました。



現地出発前の打合せ

茨城森林管理署管内の八溝多賀森林計画区は、人工林率が8割を超え



樹冠の水平方向への成長を目測

る県内でも代表的な林業地帯です。

6月16日、藤江計画部長を含め局・署合わせて30名が参加し、主としてスギ・ヒノキの高齢人工林について、これまでの施業経過等を現地を確認しながら、今後の施業のあり方について検討を行いました。

高齢級間伐の施業指標林（102年生）では、適切な間伐の指標の一つである樹冠（樹木の上部にある枝葉の集まった部分）のうっ閉の見込み等を議論しました。

また、帯状・群状に伐採した複層伐実施区では、保残木や植栽木の生育状況等から、伐採面の大きさと植栽後の施業の進め方等について意見

交換を行いました。今後の施業予定地では、各人が望ましいと考える伐採や管理の方法等について若手森林官からも意見が出るなど、一人一人が現場から考え、意見を共有する機会になりました。

天竜森林管理署の天竜森林計画区は、県内でも古くからの林業地帯として有名な所です。

7月7日当日は、森林官を含め計20名が参加し、スギ・ヒノキの複層林や間伐の施業実施箇所において、現状での課題や今後の施業のあり方について検討を行いました。

複層林施業実施箇所では、単木伐採後に植栽したため下木の成長が抑えられ、次回伐採をする際に下木の損傷が見込まれることから、群状・帯状に伐採した複層林の有効性に議論が及びました。

県立自然公園区域における列状間



複層林施業実施箇所にて論議



列状間伐実施箇所

伐の実施箇所では、景観に配慮して等高線上に列を設定していましたが、残列における密度調整の必要性や選木の考え方について論議が展開されるなど、これからの施業にふさわしい伐採方法や管理の方向性について、職員一同があらためて考える意見交換会となりました。

いずれの意見交換会も、データだけでは把握しきれない現地の状況を、局・署関係者で共に照合する良い機会となり、多様な国民のニーズに広がる多様な森林づくりを職員が一丸となって進める上で求められる能力・意識の向上の一助となるとともに長伐期化等に対応した施業方法の検討や森林計画等の樹立・策定の際に参考となる現場の知見を得ることでなりました。

赤谷プロジェクト近況報告

林野庁長官赤谷プロジェクト視察



「いきもの村」でサポーター活動について説明

8月20日(水)、井出林野庁長官が赤谷プロジェクトの視察に訪れました。長官はかねてより、官民協働の取組である赤谷プロジェクトに強い関心を持っており、今回視察が実現したところです。

当日は、赤谷プロジェクト地域協議会の岡村会長、地元みなかみ町の腰越副町長、(財)日本自然保護協会からは保護プロジェクト部の茅野副部長など赤谷プロジェクトの関係者に多数集まって頂き、当局からは小林局長が同行し、活発な意見交換を行うことができました。

まず、当局から赤谷プロジェクトの概要や茂倉沢の治山事業計画の意義・経緯等について説明した後、「いきもの村」手前で赤谷プロジェクトエリア全体を遠望、「いきもの村」で「赤谷の日」などの取組を通じて、赤

谷プロジェクトを支えているサポーターの方々の活動について説明しました。

岡村会長からは赤谷プロジェクトが生まれた経緯や、赤谷の森の優れた自然環境が今後のエコツーリズムによる地域振興につながっていくことへの期待について説明して頂き、みなかみ町からは地元で展開している赤谷プロジェクトの活動が今後さらに発展していくことを期待する旨お話を頂きました。

さらに、(財)日本自然保護協会からは、生物多様性の保全・復元に取り組んでいく上で、国土の2割を占める国有林をパートナーとすることの重要性、赤谷プロジェクトの先進性などについて説明して頂きました。

今後このような機会を捉え、各方面に赤谷プロジェクトの意義を伝えていきたいと考えております。



赤沢スキー場で赤谷プロジェクトが生まれた経緯について説明

森林生態系スペシャリスト養成研修

森林官等の職員を対象にした平成20年度森林生態系スペシャリスト養成研修の現地研修が8月26日(火)～28日(木)に生物多様性復元に向けた様々な取組が実践されている「赤谷の森」で開催されました。

赤谷センター職員から、赤谷プロジェクトの概要、カラマツ漸伐試験地やスギ人工林間伐試験地における植生復元モニタリング調査などの説明を行い、「そもそも生物多様性の復元はなぜ重要か」などについて、質疑応答がありました。

講師の長島氏からは、旧三国街道沿いのブナ林において、ブロンーブランケの植物社会学的手法による植生調査の説明がありました。

この調査では、20m四方の調査区を設定し、高木層、亜高木層、低木層、草本層ごとに生えている植物種の群度・被度の調査をし、普段は見過ごしている植物の名前を一種づつ同定しました。

(財)日本自然保護協会の辻村氏からは、双眼鏡や望遠鏡の使い方から、外見上の特徴や飛び方などによる猛禽類の見分け方について、実践的な説明がありました。

当日は雨模様で天候の悪い中、ノスリ、トビ、オオタカを観察することが出来ましたが、一瞬のシルエットから種類を判別するには、かなりの訓練を積む必要があると感じました。

今後、この研修で学んだことを活かして、森林生態系全体を考えながら森林施業に取り組んで頂ければと思います。



ブナの倒木更新について解説



猛禽類調査の実習の様子

各署便り

親子で木の工作を楽しむ

茅葺 8月6日(水)、夏真っ盛りの暑い中、当所において、夏休み親子森林教室・工作体験を開催しました。このイベントは、木に触れ楽しく工作をすることで、森林に興味を持つてもらい、併せて当所のPRにつなげる目的で、毎年夏休みに合わせて実施しています。7回目となる今回は、一般公募により14組31名の親子が参加しました。

子供達には紙芝居、大人の方達にはビデオを使って森林の働きを紹介し、木工の基本と道具の説明をした後、輪切りにした木・小枝・木の実等を使って、自由に工作してもらい



色々な作品ができました

ました。

今回はお父さんの参加が多く、刃物の扱いも慣れた様子で、鋸やナイフ等を使った経験が少ない子供達をしつかりとサポートしてくれました。出来上がった作品はきれいに並べて鑑賞会を行い、作品の発想や出来映えにお互い感心しあっていました。

感想には「木の工作は難しかった、でも楽しかった」「良い体験ができた」という声が多く寄せられ、中には夏休みの提出課題にする子もいるようでした。作品を嬉しそうに持ち帰っていました。

(指導普及担当主幹 大野亜樹子)

フォーラム「21世紀型湯治場 —森林・温泉を利用した健康づくり」開催

沼田署 8月23日(土)、草津中学校体育館において、NPO法人MORIMORIネットワーク主催、当署などが協賛するフォーラムが首都圏からの参加者30名を含む150名の参加により開催されました。

草津町長中澤敬氏の基調講演「草津町 本格的リゾートへの取り組み」の後、パネルディスカッションに移り、コーディネーターに望月照彦氏(多摩大学教授)、パネリストに白澤卓二氏(順天堂大学大学院教授)、上



草津温泉で森林フォーラム開催

原巖氏(東京農業大学准教授)、市川薫氏(草津温泉ホテル一井女将)、芳村真理氏(MORIMORIネットワーク副代表理事)を迎え、温泉・森林健康をキーワードに活発な意見交換が行われました。

フォーラム終了後は、パネリストを囲んで交流会が行われ、地元食材を活かした健康食や民謡で交流を深めました。

翌24日(日)は、国有林に設定している草津森の癒し歩道「ロイヤルコース」を約40名の参加者が散策し、森林の精気を身体一杯に浴びていました。(広報連絡官 関上辰弥)

森の恵みで工作!!

利根沼田署 8月6日(水)、「夏休み森の工作コンクール」を当署にて

開催しました。

沼田市内の小学生を対象に、森の恵みである木の実や枝などを使い、自分だけのオリジナル作品を作ってもらうことで、「森林に対する関心を深めてもらう」、「地域における森林管理署の役割を理解してもらう」、「林野庁では美しい森林づくり推進国民運動実施中である」こと等のPRを目的に実施したものです。

76名の参加者が4組に分かれ、当署が準備した材料で思い思いの作品を作りました。

初めて見る木の実等に、子ども達は興味津々。「何に使おうかな。」とアイデアをふくらませていました。

完成した作品は、審査会を経て沼田市施設(「サラダパークぬまた」)にて展示するとともに、署において表彰式を行いました。

参加者からは「今後もこのようなイベントに参加したい。」との声が多



作品作りに励む子どもたち



夢中になって水生生物を探す子どもたち

笹ヶ峰高原で体感学習

く聞かれ、地域の子とも達と触れ合
いながら、森林をもっと身近に感じ
てもらえるような機会を提供してい
くことの大切さを実感しました。

(森林ふれあい係長 江上麻里子)

〔下越署〕 8月10日(日)、当署を含む
関係機関等の連携・協力の下、妙高
市主催により、エコツーリズム妙高
「夏休み親子自然教室 in 笹ヶ峰」が開
催され、200名の親子が参加しま
した。

当署では、上越地域振興局、妙高市、
妙高市理科センター、国際アウトド
ア専門学校とともに、「関川源流体感
コース」及び「癒しの森体感コース」
を案内しました。

関川源流部の真川に設定した「関
川源流体感コース」では、子ども達

が水の冷たさに歓声を上げながら、
溪流に生息する水生生物を採取し、
携帯用顕微鏡で観察するなどにより
川の清流度を調べました。

涼しい風が吹く「夢見平」に設定
した「癒しの森体感コース」では、
親子で森林内外の気温を測ったり、
簡単な実験で森林の保水力を確かめ
たり、ブナの年輪を数えたり、キハ
ダの苦い内皮をなめてみると、体
験を通じて森林について学びました。

それぞれの体感コースから帰った
参加者達の感想は、「夏休みの良い思
い出となった」「クロサンショウウオ
など、貴重な生き物が見られて楽し
かった」「素晴らしい森林と分かった
ので、また訪れてみたい」と好評で
した。(流域管理調整官 山下 聡)

「森と湖に親しむひびく」に参加

〔山梨所〕 8月30日(土)、当所は「森
と湖に親しむひびく」(主催 山梨県・
山梨市観光協会)に参加し、国有林
野事業のPRに努めました。

今年、山梨市の「道の駅みとみ」
と「広瀬ダム」を会場にして、ポー
ト乗船、土石流模型実験コーナー、
発電実験模型の展示・体験などのほ
か、「じよいそーらん山梨県大会」も
併せて開催され、県内外から大勢の
人が訪れました。



森林クイズは大人気、報道関係者も取材

当所は、小枝のモックン作り、丸
太切り体験、森林クイズ等を行い、
小さな子供達から大人の方まで大変
好評でした。

また、笛吹川の治山事業を紹介し
たパネル展やパンフレットの配布等
も行いました。

このイベントには毎年参加してい
ますが、今回初めて「森林クイズ」
を行い、本物の木の葉や木の実を使
った問題に、子供達は真剣に取り組み
友達と一緒に答えを考えていました。

このクイズに参加したことをきつ
かけとして、子供達が今まで以上に
森林に興味を持ってくれればと期待
しています。(広報連絡官 生方啓司)

小学5年生

100名が来署

〔磐城署〕 9月3日(水)、いわき市立

平第二小学校の五年生100名が「総
合的な学習」の一環として、森林に
ついて学習するため来署しました。

学習のはじめに、署長から「森林
と地球環境」と題して、森林の働き
や地球温暖化問題についてわかりや
すく説明しました。

その後、森林土壌と学校の校庭の
土の吸水速度の違いを実験によつて
確かめたり、また、「モックン」作り
も体験してもらいました。

生徒達からは「モックン作りは楽
しかった」「地球温暖化について理解
できたので、エコに努めたい」「木造
の家を建てたい」「森林の重要性が理
解できた」等々の感想や意見があり
ました。

地球温暖化防止等に果たす森林の
役割や木の温もりについての理解を
深めてもらえた一日となりました。



真剣に「モックン」作りをする子供たち

(広報連絡官 児山富士男)

森林官からのおたより

群馬森林管理署 渋川森林事務所

森林官 島田早苗

群馬県のほぼ真ん中にあたる渋川市に、私が勤務する森林事務所があります。

管轄区域は渋川市、前橋市、富士見村の広範囲にわたり、ここに3,632haの国有林が団地状に分散する形で存在しています。

北部の小野子、子持山系ではスギ・ヒノキの人工林が多く、木材生産が盛んに行われており、東部の赤城山系は、山頂周辺を中心に、特有の自然景観を利用したレクリエーションの場として利用されています。

特に、群馬県を代表する山である赤城山は、火山地形特有のゆるやかに裾野が広がった雄大な地形をしており、山頂部には大小のカルデラ湖があります。

春先から初夏にかけては様々なツツジが咲き乱れ、息をのむような美しさです。

最高峰の黒檜山(1,828m)への登山はもちろん、夏には湖畔でキャンプする



ヤシオツツジ咲く黒檜山登山道から大沼を見下ろす

人の姿が数多く見られ、秋には紅葉が美しく、冬には湖面が氷結しワカサギ釣りのテントが立ち並ぶといったように、四季を通じて観光客が絶えません。

当部内は首都圏からの交通の便の良さもあり、法人の森林やボランティアの森等も設定されています。渋川市赤城町にはNPO法人、渋川

市、関東森林管理局が共同で森林整備に取り組み「あかぎ親しみの森」があり、毎年2回の森林整備が行われています。平成10年の活動開始以来、今や参加ボランティアが増え、多くの人が森林整備を通して森林とのふれあいを楽しむ場となっています。

森林官としての業務は、春の植付からはじまり、造林請負関係の業務が夏まで続き、秋が近づけば来年度事業のための踏査や収穫調査が加わり、報告書類の作成に追われるうち、あつという間に冬になってしまいます。

その後も管理関係や、調査書類の残りを作成していると1年が終わるといった感じで、なかなか気の休まることがありません。

特に、1年目は年間の仕事の流れが読めず、色々と苦労することもありました。

近隣事務所との距離も離れているため先輩森林官と仕事を共にする機会は少なく、現場にはもっぱら基幹



伸びやかな赤城山の裾野

作業職員の方と同行し、山や林業の話聞きながら仕事をさせていただきました。

私はずっと登山が好きなので、長い稜線上の境界などを見回るのは楽しく、長い距離をやり遂げたときにはなかなかの達成感があります。

また、自分の調査した森林に手が入り、適切に整備されていく姿を見るのも森林官としての醍醐味のひとつだと思います。

これだけの広い山系が自分に任されているのだと思うと身の引き締まる思いがしますが、少しでも任せられた森林を良い方向に導くために「日々これ勉強」と思いながら山に向かう毎日です。



レンゲツツジが満開の赤城白樺牧場

私の視点 「森に暮らして」

南アルプス芦安山岳館館長

塩沢 久仙しおざわ ひさのり



南アルプスの北部は本邦第二の標高を誇る北岳を擁する白峰三山、花崗岩の甲斐駒ヶ岳と鳳凰三山、南アルプスの女王と呼ばれ、遠く赤石岳に続く尾根を張っている仙丈ヶ岳からなり、全山ブナやウラジロモミ、ツガ、シラビソ、トウヒ等からなる見事な原生林に覆われ、感動的な景観を誇る3,000mの稜線にはライチョウが遊び、可憐な花達が咲き誇り、刻み込まれた美しい渓谷は清冽な水が時には滝を落としながら流れ下る、日本山岳の原風景がそこにあります。



昭和57年災害時の広河原

この3枚の写真は私が生活する広河原から北岳を望んだものです。荒廃が進む大樺沢に、コンクリートで固められた堰堤が13基入りました。この工事の時は工事車両が頻繁に出入りして、静かな広河原にブルド



昭和51年

昭和59年

現在

ーザーやダンプカーのエンジン音が響き渡っていました。大勢の登山者がこのような状況を見て「自然破壊」だと現場にいる者に訴えます。(この現象は南アルプス林道広河原〜北沢峠間の工事のときも同様であったと聞いています)訴えられる私達は、工事施工者の立場で、その苦情に対する言い訳をするのですが、目の前で工事が進展しているので説得力がありません。しかし時間が過ぎて3枚目の写真のように河畔林が育ち、見事に緑が復活している現在では文句を言う人は一人もいません。もし工事進行中に完成後の景観予想図があったとして、自然の中にブルドゥーザーがいなくても素朴な自然保護者に、工事の効果を説得するのは難しいかもしれません。なぜなら、自然を傷つけることは、たった一人で一瞬のうちに出来ても、この例のように自然を本来の姿に戻すのには、たくさんの人手と、



冬羽に替わった北岳のライチョウ



キタダケソウと間の岳

雪より春雪の降雪量が多く、紅葉の見頃が半月近くも遅れています。また、稜線では、国の特別天然記念物のライチョウが減少し、サルやニホンジカが、本来の生息地ではない亜高山や高山帯に進出して高山植物を食べつくし、表土の流出に拍車がかかっています。それにはさまざまな要因があるとは思いますが、多くの研究者達はその原因の1つに「私達人間のライフスタイルに起因した地球温暖化があげられる」と報告しています。現在私達が置かれている地球環境を、より良好に保つための担い手は「森林」なのだと思います。ならば、木々の生態や森の機能を学び、身近にある森林を大切に育てていくことが、今を生きる私達の最も大切な役割なのです。

とても長い時間を必要とするからなのです。近年南アルプスでは、固有種のキタダケソウの開花が80年で約一ヶ月近く早まり、冬

「トキ」再び大空へ

9月25日(木)、27年ぶりに佐渡の大空にトキが舞いました。

当日は、秋篠宮殿下、同妃殿下をお迎えし、当局小林局長を含め多くの関係者が見守る中、トキセンターで人工飼育された10羽のトキが野生復帰のため試験放鳥されたものです。

かつてトキは、日本のいたるところに生息しており、珍しい鳥ではありませんでした。それが乱獲や生息環境の変化とともに激減し、日本では唯一、佐渡に残るだけとなってしまいました。

昭和56年には残った野生のトキ5羽を一斉捕獲し、環境省・新潟県佐渡トキ保護センターで繁殖を試みるもかなわず、平成15年、最後の日本産トキ「キン」の死亡により日本のトキは絶滅してしまいました。



放鳥され、元気に大空へと飛び立つトキ

ンティア・NPO・行政がさまざまな取組を行ってきました。エサ場となるビオトープを整備し、農業もできるだけ農薬を使わない取組が行われ、トキの生息環境を整えてきました。

林野庁では、絶滅に瀕したトキのために、昭和37年から昭和45年にかけて生息地である約1,000haの森林を国有林として買い入れ管理をしてきました。

平成15年度からは、トキの営巣候補地等保全整備事業を実施し、営巣木となるアカマツの保全に努めています。

近い将来、きっと国有林でも営巣してくれることでしょう、そして佐渡の空、日本の大空を沢山のトキが飛んでくれることを願っています。

(下越署 森林官 田中英司)

人命救助で表彰!!

利根沼田森林管理署の高松毅(たかたけ)さん



人命救助で感謝状を受賞した高松さん
は、人命救助に功績があつたとして、新潟県与板警察署

から感謝状を贈呈されました。
高松さんは8月15日(金)、新潟県出雲崎町の「久田海岸」で海水浴中、沖合で子供が溺れ、それを助けに行つた父親も一緒に溺れているのを発見しました。

近くにいた人と協力し、子供を浮輪で救助し、水中に沈んでいた男性を浜辺まで引き上げ、救急車が到着するまでの間、心臓マッサージを繰り返して、尊い人命を取りとめることが出来ました。

高松さんは、「署での救急法の講習を受けていたことが役立ち、人を助けることが出来てよかった。」と話しています。

(利根沼田署 広報連絡官 菊池一紀)

一枚の写真



残雪期の苗木選別作業

この写真は、昭和30年代初期の旧館腰種苗事業所での作業風景です。

国有林野事業で唯一女性が多かったこの職場は、新潟県の北端、村上市(旧朝日村)の熊登国有林で、JR村上駅から北東へ9.5キロメートルに位置していました。

この事業所の歴史は、昭和2年に国有林内5,000平方メートルを開拓した三面苗圃が始まりで、その後、防風林等を含め約15haの事業施設となり昭和の最盛期には、スギ苗木を主として年

間32万本の山出しを行ってきました。

その事業所も平成5年3月に閉所となり、現在は新たな名称を「ふれあい里山の森」とし、花・木の実・野鳥などの観察を目的とした「ふれあいのエリア」「ブナのエリア」等、体験する目的に合わせたゾーンを整備しています。

今年度は、昨年当地で林業体験したスポーツ少年団が、炭焼窯の体験を、今か今かと待ち焦がれています。

写真の女性達が生産した苗木は、そ

れぞれ山で伐採の時期を迎えており、半世紀という時の流れを感じるとともに、スギの苗木に代わって、今は2層のブナが、ふれあいを大切にするという使命感を背負い成長し続けています。

(村上支署 広報連絡官 富樫善弥)

発行所 関東森林管理局
編集 総務課

TEL(027)210-1158
FAX(027)210-1159

